実践女子大学図書館蔵『舌切雀』影印と翻刻

松原哲子

実践女子大学図書館常磐松文庫には鱗形屋板と山本板の舌きれ雀の初期草双紙（赤本）が存在する。両者の内容はきわめて類似しているが、それぞれその当時の歌舞伎に取材した箇所があり、その年代の違いから舌きれ雀の赤本の享受が長期間に亘っていたことを示している。このことは、赤本とは何かということを考える上での重要な手掛かりのひとつとなると思われる。そこで本稿では、それぞれについて影印を紹介し、内一点については翻刻を併せて示したい。

一、書誌

それぞれについて体裁を示すと以下の通りである。

○『したきれ雀』

表紙　替表紙。丹色、雷と鳥の型押し文様。

題簽　欠。表紙に短冊状の題簽の痕跡がみえるが、元のものではない。後述の通り、鱗形屋板『したきれ雀』と同板と判断されるので、本書の書名もこれに従う。

寸法　表紙　一七・四cm×一二・九cm

本文匡郭　一五・九cm×一一・八cm

柱刻　志た切すゝめ　▲一（二～五）

紙数　五丁

刊記　なし

画工名　なし

板元　不明。ただし、東洋文庫（岩崎文庫）蔵の『したきれ雀』と同板で、これには一丁表の匡郭上部に丸に鱗形の商標がみえ、鱗形屋板であることが確認できる[注1]。よって本書は鱗形屋板の後摺であると判断される。

○『舌切雀』（書名は書題簽による）

表紙　替表紙。黒色、無地。

題簽　短冊形書題簽。「舌切雀／黒本／山本重春画」とあり。

寸法　表紙　一七・四cm×一三・〇cm

本文匡郭　一六・一cm×一二・三cm

柱刻　志た切すゝめ　壱（二～五）

紙数　五丁
刊記　なし
画工名　一丁裏「山本平七郎重春之書」、四丁表「山本重春筆」
板元　一丁表の匡郭上部に丸に「山」字（丸の左右に「大叶」字）の商標があることから、山本板であることがわかる。

二、山本板『舌切雀』について

山本板『舌切雀』と鱗形屋板『したきれ雀』を比較してみると、場面の展開や挿絵の構図が近似している。本文部分についても一致している部分が非常に多く、両者の間に関係があったものと考えられる。

作中の登場人物名についてみてみると、「弥五太夫」とその娘の「お梅」が共通しており、伴の者については鱗形屋板が「新八」、山本板が「長七」となっている(注2)。舌切雀物の作品の系譜を追ってみると、主人公の名は「弥五太夫」、その伴の名は「新八」とするのが主流だと思われ(注3)、本書にみえる「長七」という名はこれから外れる。また、弥五太夫の娘の名前には「おみつ」や「おしも」などの異同がみられるが(注4)、本書と鱗形屋板では共通しており、この点もまた両者の関係を示しているといえよう。

両者の最大の違いは、四丁表の、弥五太夫とお梅と伴の者の三人を雀の所でもてなす際に披露される踊りの場面である。

鱗形屋板『したきれ雀』では、弥五太夫の「これは菊之丞がしたやりをどりじやの」、新八の「いよ〳〵をらがせ

川様め」といったせりふや、唄の詞章取りと思われる「さまにあふてのあさかへり　けしきたのしむ男はだてに　又とあるまい一代やつこ　しかしこよいはかりねの枕　恋の中の町　御さきでふれ〳〵　御ともでふれ〳〵」の一節などから、元文二年（一七三七）江戸中村座の歌舞伎「一代奴一代男一代女」で初代瀬川菊之丞が演じた所作事に取材していることが明らかにされている(注5)。

一方、山本板『舌切雀』では、この場面はいわゆる道成寺になっている。鐘を描いた屏風の前で扇を手に烏帽子姿で踊る雀が描かれ、「いりあいのかねに　はなやちるらん　はなやちるらん」という詞章が記され、踊る雀の芸者を「いよ〳〵　をらが〳〵　すゝめのこをどりてうづめ〳〵」と丁稚の長八がほめている。この場面は、享保十六年（一七三一）春江戸中村座の「傾城福引名護屋」で上演された初代瀬川菊之丞の「傾城道成寺」や、延享元年（一七四四）春中村座の「碾末広曽我」で上演された初代瀬川菊之丞の「百千鳥娘道成寺」の好評を反映したものとみられることについては既に指摘がある(注6)。

両者の刊行が、それぞれ典拠とする歌舞伎の上演に即して刊行されたとすると、鱗形屋板は元文三年（一七三八）あたり、山本板は享保十七年（一七三二）もしくは延享二年（一七四五）あたりの刊行と推測されるが、鱗形屋板と山本板では、いったいどちらが先行するのであろうか。

まず、本書の画工が山本重春であることから検討してみたい。

これまでの先行研究において取り上げられてきた山本重春の草双紙と、それぞれに対する見解を示すと以下の通りである。

○『千本左衛門』

三巻三冊。題簽及び作中に商標あり。寛保三年（一七四三）三月大阪豊竹座の浄瑠璃「鳴門緋袴鹿間褐染／風俗太平記」（寛保三年江戸辰松座でも上演されたか）およびその浄瑠璃絵尽し本に取材している(注7)。

○『日本蓬艾の始』

寛延二年（一七四九）刊か（一丁表に「巳のとしの新板」とあり）。二巻二冊。作中商標あり。宝永六年（一七〇九）江戸山村座の歌舞伎「傾城雲雀山」の艾売りのせりふを草双紙化したもの(注8)。

○『新板軍法／富士見西行絵尽』

三巻三冊。題簽及び作中に商標あり（一丁表の商標は陰刻となっている）。延享二年（一七四五）大坂竹本座初演の浄瑠璃「軍法富士見西行」の正本のダイジェスト(注9)。

○『紅皿闕皿昔物語』（正しくは『哥合昔日噂』か。(注10)）

二巻二冊。作中商標あり。

このほかに、『三輪山猿手柄』（二巻二冊、作中商標あり。大東急記念文庫蔵）などが挙げられる。題簽の意匠や新板目録の記載などから刊年を確定することはできないようだが、各作品の既存の文芸からの摂取の有り様から推測する限り、山本重春は延享ごろに活動した画作者だったとみられる。また、これらは全て本文匡郭上部に商標がみえ、柱刻の様式も類似しているが、この点についても山本板『舌切雀』は一致しており、本書も他の山本重春の草双紙と近い時期に刊行されたものと推測される。

武藤純子『初期浮世絵と歌舞伎―役者絵に注目して―』（笠間書院、平成十七年）によって山本重春の活動をみてみると、延享二年（一七四五）に役者絵が確認でき、宝暦四・五・六年（一七五四～一七五六）には山本義信と改名した後の役者絵が存在する。よって草双紙での状況と考え合わせると、重春の活動期としてはまず延享期が考えられ

ので、山本板『舌切雀』を延享元年の「百千鳥娘道成寺」に取材した、翌延享二年の刊行と推定するのが妥当のように思われる。ただし、重春の号での活動の下限については宝暦初年前後が考えられるものの、活動の上限についてはそれを明確にするための材料が十分とはいえず、検討の余地があるといえる。

山本重春の活動を追うことによって山本板『舌切雀』の刊行年を類推し、鱗形屋板との関係を明らかにしようとしても、現存する作品が少ない現状においては明確な答えを見出すことはできない。

つづいて、板元である山本の出板活動から検討してみたい。現存する山本板の草双紙のうち刊年を確定できるものは、宝暦初年から明和初年に亘っている(注11)。しかしながら、これらは、原題簽の意匠や作中の新板目録と照合することによって刊年を推定できる作品のみに依ったものであるので、山本板の草双紙刊行がこの時期に限定されることを示すものではない。

先掲の『初期浮世絵と歌舞伎―役者絵に注目して―』によれば、山本は元文二年（一七三七）から明和二年（一七六五）まで役者絵を刊行していたことが確認できる。よって、初期草双紙の刊行についても、もっとさかのぼる可能性がある。しかしながら、山本板の初期草双紙は、宝暦十年（一七六〇）以降、題簽や新板目録に丸に「山」字と丸に「丸小」字の二つの商標を掲げ、作中商標が「丸小」となっている、いわゆる丸小板の体裁の本が刊行されるようになるなど、活動の実態が不明瞭な点も多い(注12)。

ただし、管見の限りではあるが、山本・丸小板の草双紙をみてみると、山本板の中でも宝暦期から明和期にかけての刊年が特定できる作品の柱刻は、山本板『舌切雀』のそれと意匠が全く異なっている(注13)。この柱刻の意匠が宝暦十年以降の丸小板に踏襲されていることを考え合わせると、山本板『舌切雀』は宝暦・明和よりも早い時期の刊行で

あったことが推察される。

現在確認できる山本の役者絵刊行の上限が元文二年（一七三七）であることからすれば、山本板『舌切雀』は延享二年（一七四五）刊行が妥当ということになるが、武藤氏によれば、山本は享保十年（一七二五）に既に役者絵を刊行していた可能性も考えられ(注14)、享保十七年（一七三二）刊行の可能性についても、検討する余地がある。

そこで最後に、鱗形屋板と山本板とを並べて見比べた際にいくつか気付いた点を踏まえて私見を述べたいと思う。

まず、一丁裏の慳貪婆が雀の舌を切る場面について、慳貪婆のせりふをみてみると以下の通りになる。

鱗形屋板　につくいすゝめだ　いそがしいにせつかくにたのりをみんななめた　はらがたち申

山本板　てさて〳〵（ママ）につくいすゝめだ　いそがしいに　せつかくにたのりを　みんなにした　うそはらのつゝたつ

山本板の「てさて」の部分の意味が取れない。単なる誤刻かもしれないが、鱗形屋板と比べて板面に対する文字の配分が円滑でないことを併せるとやや違和感を感じる(注15)。また、三丁表の、弥五太夫の「き様はけらいしゆか」というせりふが、最もせりふとして読者が読み易い弥五太夫の顔の隣に十分なスペースがあるのにも関わらず、隣にいるお梅の頭の上に配置されている。三丁裏の弥五太夫の「こなたのしたはなをりましたか」、雀の「御じい様御ちそうにげいしやを申付ました」というせりふについても、鱗形屋板に比べると読み難い配置に感じられる。その他にも、登場人物のせりふを追っていくと、配置に違和感を感じる箇所がいくつか見受けられる。

挿絵の構図についても、鱗形屋板の方が、より自然な描かれ方がなされているような印象を受ける。例えば、三丁表の「すゝめのかくれざと門がまへ」の場面を見てみると、伴の者が「さて〳〵けつこうな門がまへかな」と感心し

ているその門の様子が鱗形屋板でははっきりと描かれているが、山本板では門構えよりも出迎えの雀の方が目立っている。よって、板面に対する文字の配置や全体の構図などから受けた印象から推測する限りでは、鱗形屋板が山本板を踏襲したととらえた方が妥当なように思われる。

以上のように、現時点で検討してみる限りでは、山本板『舌切雀』は、鱗形屋板『したきれ雀』の刊行後、これを踏襲するかたちで延享二年（一七四五）に、時事的な場面つまり初代瀬川菊之丞の所作事を組み込むという趣向のみを変更して刊行されたと考えられる。

山本板『舌切雀』の位置付けをより明らかにするには、現存の山本重春作品によって活動の実態をできる限り明らかにし、それを板元山本の出板活動の中で位置づけてみることが必要だと考えられる。そのためには、現存の山本板の出板物一点一点を精査し、その出板活動や草双紙の形態の変化などを編年的に追うことによって補っていく作業が不可欠だといえる。これを今後の課題とする。

注1　『近世子どもの絵本集　江戸篇』（鈴木重三・木村八重子編。岩波書店、昭和六十年）に、影印および翻刻が紹介される。

注2　この他に、山本板では冒頭の場面で「いのすけ」という子供の名前が出てくるが、鱗形屋板ではみられない。

注3　「弥五太夫」と「新八」の組み合わせは、古くは享保八年（一七二三）刊行の赤小本にみえ、鱗形屋板の赤本の他、黒本の『新板／舌切雀』（鳥居清満画。鱗形屋板）などに継承されている（『近世子どもの絵本集　江戸篇』および内ケ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』〈三弥井書店、平成十一年〉）。

注4　注3に同じ。
注5　注1に同じ。
注6　佐藤悟「草双紙に関するいくつかの疑問」（『江戸文学』第三十五号、ぺりかん社、平成十八年十一月）
注7　加藤康子「赤本『千本左衛門』について」（『叢』第十三号、平成二年七月）
注8　小池正胤「『日本蓬艾の始』について」（『昭和六十三年度科学研究費による「江戸時代の児童絵本の調査分析と現代の教育的意義の関連の研究」報告書』平成元年二月）
注9　三好修一郎「『富士見西行』について」（『叢』第四号、昭和五十六年五月、『江戸の絵本Ⅱ』国書刊行会、昭和六十二年）
注10　木村八重子「黒本・青本における異版と校合本」（『書誌学』第三十号、昭和五十七年）、『近世子どもの絵本集江戸篇』
注11　作中商標が丸に「丸小」字となっている山本小兵衛板を除く。
注12　例えば、明和二年（一七六五）刊の『東荘寺合戦』（鳥居清満画）は、丸に「山」字のみを配する題簽を有し、作中商標も「山」字となっている。宝暦十年以降丸小板の刊行がなされているので、丸に「山」字の商標を有する題簽が、山本板と丸小板の二種同時期に併存していたと考えられる。作中商標は、それぞれ丸に「山」字および丸に「丸小」字となっており、両者の関係については検討を要する。この作品については丹和浩氏によって紹介がなされている（『昭和六十一年度科学研究費による「江戸時代の児童読物の中心となった赤本・黒本・青本の調査内容分析と翻刻研究」報告書』昭和六十二年三月、『江戸の絵本Ⅱ』国書刊行会、昭和六十二年）。
注13　宝暦期以降の山本板の多くには作中商標がなく、柱刻の大ぶりの円や三角形などの意匠を組み合わせ、巻毎に

配色を反転するなどの凝った意匠が使われている。この時期の作中商標を伴うものについても柱刻の意匠は同様である。それに対して、山本板『舌切雀』の柱刻には装飾的な意匠が用いられていない。

注14　刊年を推定したもの含めると享保十年（一七二五）から安永三年（一七七四）までの広がりが想定される（武藤純子『初期浮世絵と歌舞伎―役者絵に注目して―』）

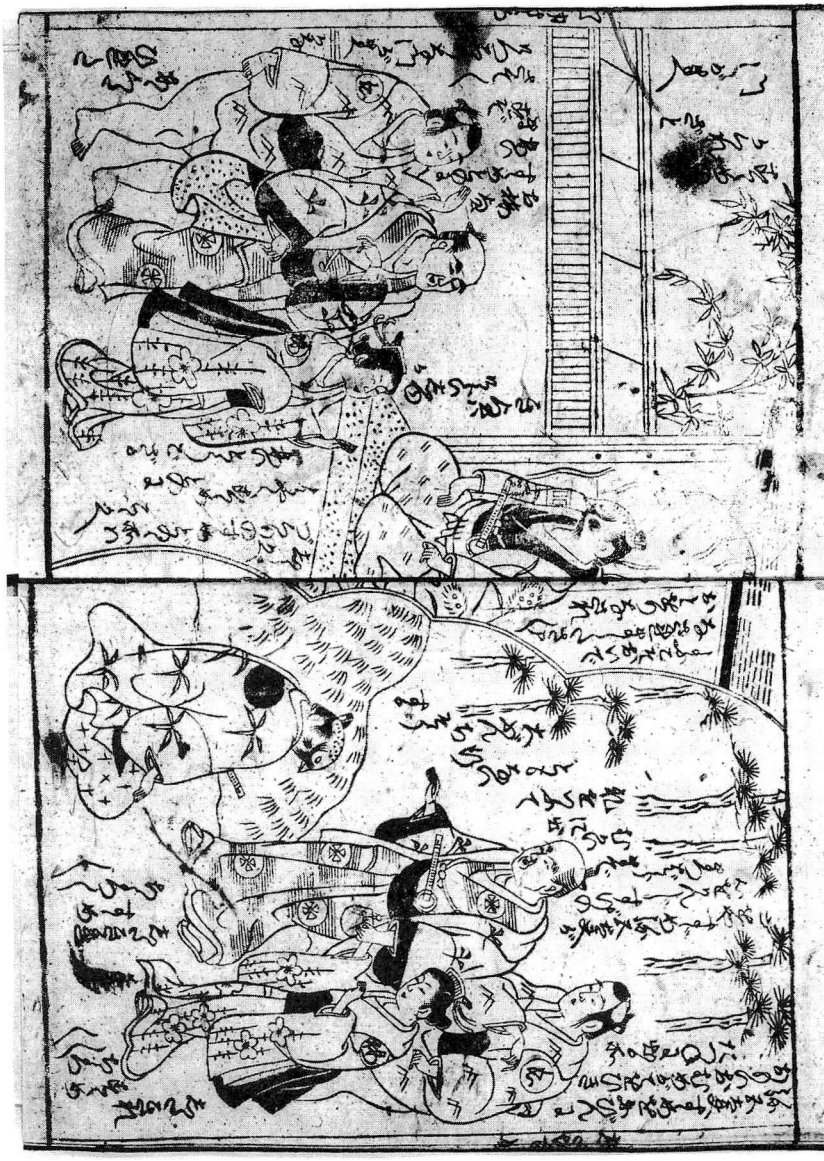
注15　他に、鱗形屋板の四丁裏、雀の所を去る弥五太夫たちを見送る雀の家来について「弥五太夫になじみて　のこりをがり」という描写があり、「をがり」の部分について、『近世子どもの絵本集　江戸篇』では「し」の字を補い「をしがり」としているが、山本板の対応部分も「をがり」となっている例がある。

（表　一丁）

山本板『舌切雀』

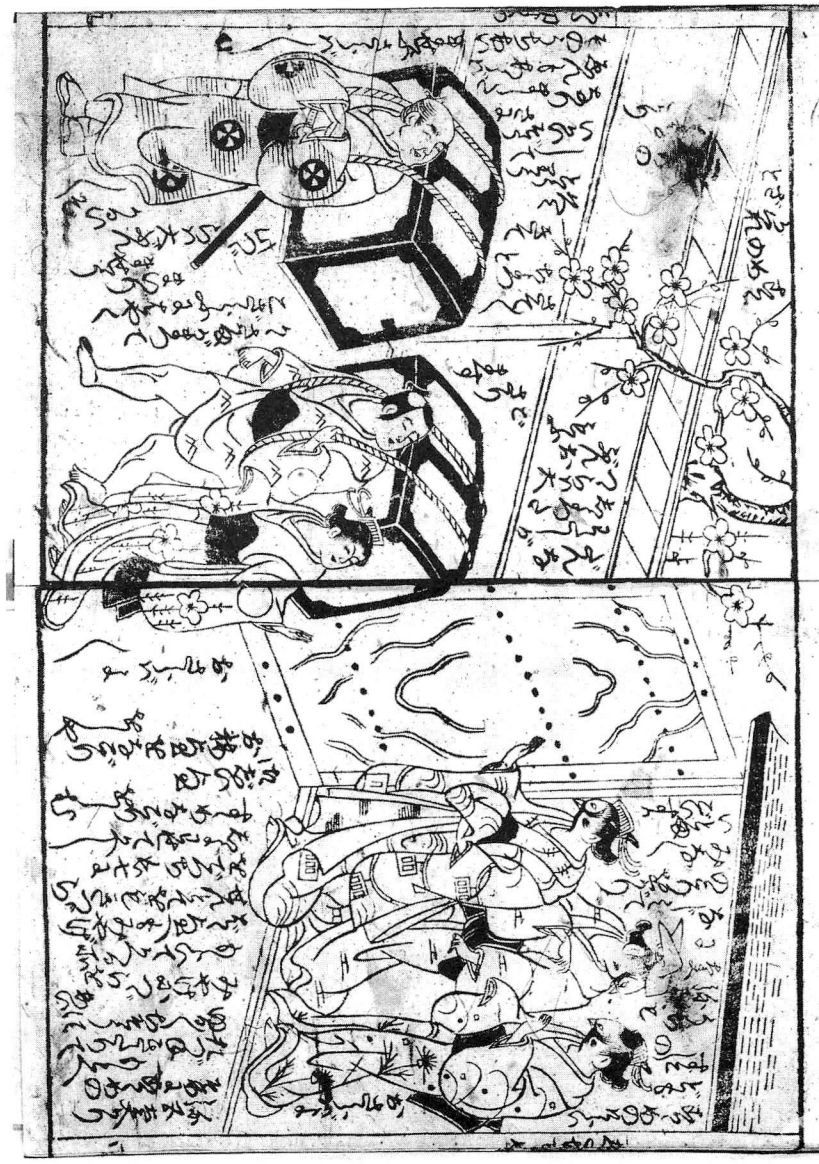
（実践女子大学常磐松文庫蔵）

（一一七葉・一一八葉）

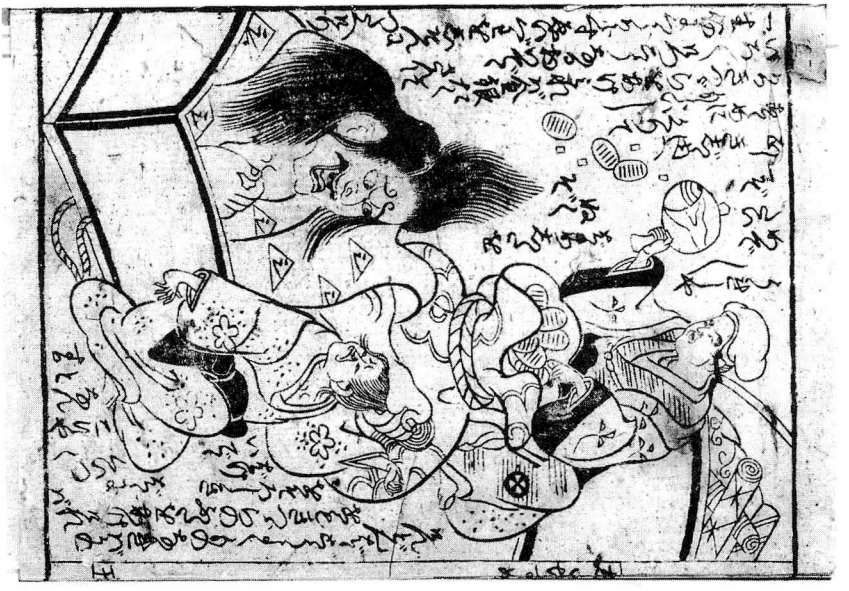


（二十五・二十六）

（三十三表・四十表）



（四丁裏・五丁表）

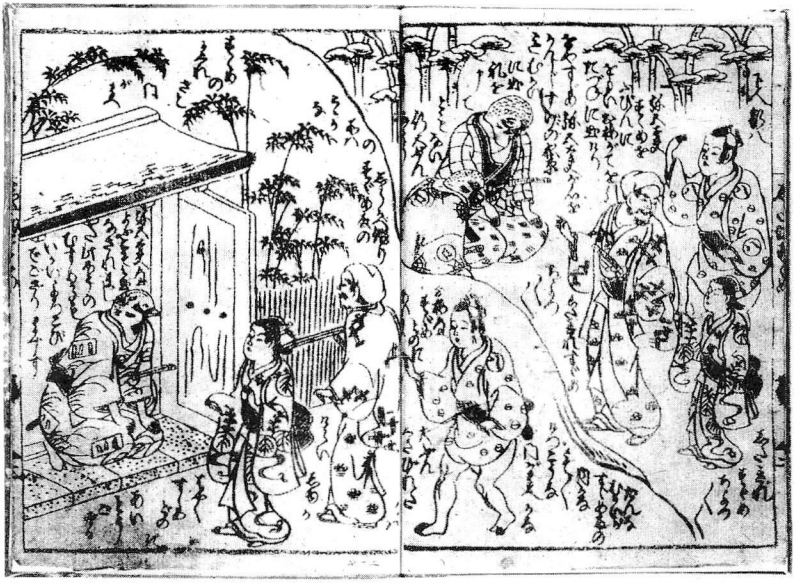


（五十嵐）

鱗形屋板『したきれ雀』（後摺本）
（実践女子大学常磐松文庫蔵）

（一丁表）

（一丁裏・二丁表）



（二丁裏・三丁表）

（三丁裏・四丁表）

（四丁裏・五丁表）

（五丁裏）

翻刻

文節の切れ目に適宜空白を入れ、登場人物のせりふについては各々（　）内に示した。

（一丁表）

むかし〳〵さるいなかに　もゝの弥五太夫といふものありけり　じひふかく　せうしきなりしか　あるとき子供あつまり　すゝめを一羽とらへ　うちころさんとするところへ　弥五太夫とをりあはせ　子供にせにをとらせ　すゝめをもらいて　わかやにかへる

（弥五太夫）みんなにぜひをやろうぞ　よい子じや　そのすゝめをおれにうつてくれい

（子供）いのすけ　うつてやろうか

（雀）ちう〳〵〳〵

（一丁裏・二丁表）

弥五太夫すゝめをかいとり　うちへもどり　むすめおむめによろこばする

おむめすゝめを　かはいかりけり

むすめうれしがる

（弥五太夫）百でかい申た

けんとんはゝはらたてる

（慳貪婆）あんにすべい　もし　つんにがさつしやい

山本七郎重春之書

あるとき　じゝのるすに　ばゝせんたくするとて　のりをにてさましをきけるに　かのすゞめかごより出て　のりをすこしなめければ　けんどんばゝ大ぶんはらたち　すゝめのしたをきつてはなしける事　はなはだじやけんのいたり　なさけなき事也

（お梅）かはいそうに

（慳貪婆）てさて（ママ）〳〵　につくいすゝめだ　いそがしいに　せつかくにたのりを　みんなにした　うそはらのつゝたつ

（舌切雀）ちう〳〵〳〵

（二丁裏・三丁表）

弥五太夫すゝめをふびんにおもい　おむめがてをひき　たつねに出る所　をやすゞめ弥五太夫が心をかんじ　すげのまつばらまでむかいに出　礼をいふてともない行　大ぶんちそうする

（お梅）したきれすゝめ　ちよ〳〵〳〵

（弥五太夫）したきれすゝめ　ちよ〳〵〳〵

すゝめのかくれざと　門がまへ

（雀の家来衆）よふこそおいでなされました　さア〳〵　おとをりなされ
（弥五太夫）き様はけらいしゆか
（お梅）しらかべづくりのすゞめどの、所はこゝかへ　はやくすゝめとのに　あいとうござる
（長七）お梅様　すゝめとのにあいますぞ　さて〳〵　けつかうな門がまへかな　あゝくたひれた

（三丁裏・四丁表）

（弥五太夫）こなたのしたは　なをりましたか
（舌切雀）御じい様　御ちそうにげいしやを申付ました　お梅様　よふ御らんあそばしませ
　むすめをもしろがる
（お梅）長七おもしろいの　ちとほめやれ
（長七）いよ〳〵　をらか〳〵　すゝめのこをどり　てうづめ〳〵
（唄）いりあいのかねに　はなやちるらん　はなやちるらん　いやつあ〳〵すつとん〳〵

山本重春筆

（四丁裏・五丁表）

すゝめのかくれざと　□めの□をかり

すゝめのけらいども　すこしのうちも　弥五太夫になじみて　のこりをがり　みな〳〵いとまごいする
弥五太夫かりそめにすゝめのもとへたづねきたりて　ゆる〳〵ちそうにあい　みやけにつゞらをもらいてかへる所ば、様へもみやげせんとて　をもきつゞらをでつち長七にしよわせてかへし　すゝめなごりをしむ
（舌切雀）御じい様　お梅様　をなごりをしや
（お梅）おさらばよ〳〵
（長七）だんな　わたしがしよつたつゝらは　大ぶんおもふござります
（弥五太夫）さて〳〵　ちよつときて　久々とうりうして　いかいぞうさになりました　ゑんもあらば　そのうちあいませふ　さらば〳〵　かゝさまが　まつてござらふに　はやくまいりませう　此つゞらは大ぶんかるいぞ〳〵

（五丁裏）

正しきじ、内へかへりて　すゝめにもらいし　かるきつゞらをあけみれば　金銀たくさんに　いろ〳〵けつかうなる物いで、　一生何にくらからす　ゑいぐわをしそんにつたへたり
（弥五太夫）うれしや〳〵　めでたいぞ
けんどんばゝどうよくものなれば　かのをもきつゝらのふたをあけければ　をそろしきばけいで、　ばゝにくいつく
（化け物）ばゝめ　したをぬくぞ
（慳貪婆）こりやなんとする